

武人

— 男の生き様に学ぶ —

越後長岡が生んだ偉人の一人に、かつての連合艦隊司令長官^{やまもと いそろく}：山本 五十六がいます。

山本 五十六は、旧姓 高野 五十六と言い、長岡で生まれ育ち、江田島の海軍兵学校へ進み、日本の命運を左右する立場で働いた当時日本の英雄的軍人でもあります。

米国に3年間留学をした山本は米国の国力を良く知っていて、最後まで米国と戦うべきではないと主張しながらも軍の方針に従わざるを得ず、やむを得ず真珠湾の攻撃で日米開戦の指揮を執らざるを得なかった人物です。

昨年、山本 五十六のドラマやドキュメンタリー番組がいくつか放映され、その人物像がクローズアップされてきていますが、長岡には山本 五十六の生家もそのまま残っており、また記念館には本人直筆の数々の書簡、ブーゲンビル島の上空で搭乗機が米軍機に撃墜され、その飛行機の残骸や座っていた座席、持っていた軍刀等も展示されていて、当時の生々しい状況が想像されます。

山本長官の無二の親友で、非戦論者の為、海軍を去らざるを得なかった堀 悌吉^{ほり ていきち}との書簡や本を読んでいると、組織人として自己の信念と全く異なる方向に進まざるを得なかった憂国の士の苦悩を思わざるを得ません。

山本長官の死は当時の国策の中で国葬^{こくそう}とされ、東郷元帥と共に多磨霊園に祀られています。郷里長岡にも分骨された墓所が徳真会グループ まつむら第二歯科の近くに有り、私も時々参拝をさせて頂いています。

当時の世相が非戦論から開戦論へ傾倒してゆく中で、軍人として自分の意志と異なる方向へ進まざるを得なかった苦悩は計り知れませんが、山本長官が若い軍人を教育する立場に有った時に語ったとされる有名な言葉が有ります。

男の修行 山本五十六

苦しいこともあるだろう
言い度いこともあるだろう
不満なこともあるだろう
腹の立つこともあるだろう
泣き度いこともあるだろう
これらをじっと
こらえてゆくのが
男の修行である

軍人としての男の生き様を感じさせる言葉でもあります。

コロナ感染禍にみられる様に、いつの世も国難は必ずあるものですが、

会して議せず

議して決せず

決して行わず

行ってその責をとらず

という指導者の多い今日、山本五十六の男の生き様から改めて学ぶ必要が有ると思っております。

徳真会グループ
代表 松村 博史



徳真会グループ研修センター

表紙の絵画について

〈深谷隆司先生作〉



松村代表と親交のある深谷先生に「春夏秋冬」の絵を揮毫^{きごう}いただき、

徳真会グループのわかば台デンタルクリニックにある

絵画ギャラリーコーナーに飾らせていただきました。

本号では春の絵(50号大)を表紙に使わせていただきました。

深谷隆司先生プロフィール

1935年9月29日浅草生まれ 自民党東京都連最高顧問。TOKYO 自民党政経塾塾長。温故知新塾塾長。27歳で台東区議会議員に当選。33歳で都議会議員を経て、37歳で衆議院議員となる。当選9回。郵政大臣(第52代)、自治大臣(第47代)、国家公安委員会委員長(第57代)、通産産業大臣(第64代・65代)、自由民主党総務会長(第39代)、予算委員長、テロ対策特別委員長を歴任。

